

事故当年にモモ樹体内に移行した放射性核種の本年度の動態

¹高田大輔, ²佐藤 守, ²阿部和博, ¹安永円理子, ¹田野井慶太郎,
¹小林奈通子, ¹中西友子, ¹佐々木治人, ¹大下誠一
 (¹農学生命科学研究科, ²福島県農総セ果樹研)

原発事故以来、放射性核種による土壌や農作物の汚染は高い関心事である。永年性作物である果樹では、事故当年に樹体内に移行した放射性核種が樹体内に残り続け、翌年以降も果実へ再分配される可能性もあるが、不明瞭な点が多い。前回の報告会（2012年2月18日）では、西東京市で栽培しているモモ樹体において、収穫直後（事故後5か月）における部位別の放射性Cs濃度と、樹体内の放射性Csの分配状況について報告し、3年生枝（主枝・側枝）への放射性Csの移行率が高く、さらには、樹皮において高い濃度で存在していること、また材においても低濃度ながら移行していることを報告した。今回は、①同園地のモモ樹体内の放射性Csの季節的変化、②福島県内で栽植されているモモ樹体を事故後10か月時に掘上げ、非汚染土壌に植え替えて密閉温室内に搬入後、加温条件下で促成栽培し、葉や未熟果実の放射性Cs濃度、収穫果実（要旨作成時点では未収穫、5月10日ごろ収穫予定）の放射性Cs濃度を報告する。その結果、①夏季から冬季にかけて、樹皮の放射性Cs濃度は低下の傾向にある点、②生育途中のモモ果実を分析した結果、あるいは収穫果実の放射性Cs濃度の速報値とその参照時の注意点などについて報告する。

促成栽培試験の結果を参考にする上で、考慮に入れなければならないことの例

鉢植え栽培 である	樹体小さい	葉果比が変わる、 果実サイズが小さい、etc.
	定期灌水	水分含量安定
	雑草なし	
温室(密閉) 栽培 である	土は非汚染 土を利用	土からのCs吸収がない 二次汚染がない(少ない)
	雨が ない	促成条件なので梅雨もない(日射量が多い)
	外気にさら されない	温度湿度安定



掘上時期の様子



生育途中のモモ（4月）